



御船小「ふるさと御船学」～御船町の人・自然・歴史・文化に学ぶ～

今年度、新たに「ふるさと御船学」として、生活科・総合的な学習等を行っています。「ふるさと御船学」の目的は、「地域と積極的に関わる体験活動の場を設定し、ふるさと御船に誇りを持ち、地域と関わり合いながら自分の将来の夢について考える」ことです。こうした学習を通して、御船町の人・自然・歴史・文化を、今よりもっともっと関心を持ち、大好きになってほしいと思います。

～6年生の取組例を紹介します。～

【道徳「こわれた おじいちゃんの家」】

期日：令和5年10月24日(火)

内容：「熊本地震で家を失った『おじいちゃん』が、なぜ、ふるさとに住み続けるのか？」ということを中心に考える道徳科の授業でした。

「大切な人や思い出がたくさん詰まっているから。」

「地震で家が壊れても、思い出までは壊されたくはないから。」

「町が壊れてしまっても、人々の温かさは残っているから。」

子供たちの考えを聞いた時、思わず涙があふれそうになったと、担任が言っていました。また、まだわずか12歳ながらに、ふるさとのよさや周りの人の温かさを感じて育ってきているからこそその言葉だったとも、担任が言っていました。

平成28年熊本地震は、6年生の子どもたちが幼稚園や保育園の年中の頃に起きました。その時の恐怖や不安を、うまく言葉にできない頃のことでした。

しかし、あの時のことは、しっかりと脳裏に焼き付いていることが分かります。それは、恐怖や不安の思い出だけではなく、ふるさと御船町の人々の温かさとしてもだと、以下の子供たちの振り返りを読んで思いました。



○ この「ふるさと」で暮らしている温かさは、大人になってこの町を出ていくときに、当たり前ではないことに気づくのかなあと思いました。今を大切に生きて、この温かさや優しさを大切にしようと思いました。

○ 地域の人たちからの挨拶が、「がんばろう！」と私に思わせます。思い出がいっぱい詰まっているふるすとは、とても優しく、温かく包み込んでくれるものだと思います。

